みんなで育てる「たいしの子」vol.1
幼小中一貫教育だより

「幼小中一貫教育で伸ばす！子どもの「非認知能力」」

町で育つ子どもたちの「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」を育み、一人ひとりの可能性を最大限に伸ばすため町では幼稚園・小学校・中学校の学び・育ちを12年間の連続性のもとで捉え直し、令和４年度から幼小中一貫の教育を展開しています。令和４年８月に行った町立小中学校園の全教職員が集まり、町の子どもの良いところ・課題・義務教育後について欲しい力などについて考え、議論する場を設けました。そして、保護者アンケートの結果も交えて、幼小中一貫教育で育む「子ども像」としてまとめました。

幼小中一貫教育で育む子ども（人）像

幼小中のつながりをもとに
豊かな人生とより良い社会を主体的につくるため
自ら考え、動き、相手を大切にできる人

○幼小中一貫教育で伸ばす「非認知能力」

町では上記の育む子ども像をめざして「非認知能力」に注目し、町立の１中２小１園がこれまで育んできた教育を系統的に捉え、非認知能力の育成に取り組みます。

これまでの社会は、知識・技能といった「認知能力」が評価の基準となり、その知識や技能を身につけると社会で対応できると言われていました。

しかし、これからの社会はさらに急速に変化し、予測ができない時代（VUCA の時代）と言われています。その社会変化に対応する力として「非認知能力」が注目されています。

学習指導要領でも「学びに向かう力、人間性等」として非認知能力に関する項目が取り上げられています。

様々な非認知能力がある中で、町では主に３つのグループの力「自分を高める系の力・自分と向き合う系の力・つながる系の力」を重点的に伸ばす力として取り組んでいます。それらをわかりやすく日々の教育活動で実践するために以下の７つの力を「太子町で育む主な非認知能力」としてまとめました。

※ VUCA：「V」volatility（変動性）「U」uncertainty（不確実性）「C」complexity（複雑性）「A」ambiguity（曖昧性）

太子町で伸ばす７つの非認知能力

自分を高める系

目標を持つ力
（夢・目標を持つ）

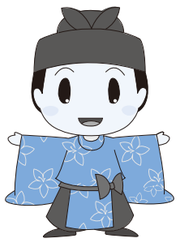
挑む力
（やってみる・挑戦）

自分と向き合う系

あきらめない力
（粘り強さ）

自己調整力
（自分を調整する力）

つながる系



伝える力（気持ち・意見を）
受け入れる力（相手を）
協働する力

○町立学校園の取り組み

町立幼稚園では11月26日(土)に「非認知能力を育む幼児教育 公開講座」を行いました。当日は保護者に加え住民の方も参加され、熱心に太子町非認知能力アドバイザーの徳留さんの講演を聞かれました。

徳留さんの講演を映像でご覧頂くことができます。QR コードをスマホカメラで読み取って頂き、ぜひ、ご覧ください。

教えて!とくどめ先生! テーマ「非認知能力って？なに？」

岡山大学で非認知能力の研究をされている徳留宏紀さんに太子町非認知能力アドバイザーとして就任頂き、助言を頂きながら幼小中一貫教育として非認知能力を伸ばす実践を行っています。

徳留宏紀さん
（太子町非認知能力アドバイザー）
昨年度まで大阪府公立中学校勤務。今年度からは岡山大学大学院で非認知能力について研究。

「非認知能力」をみなさんご存じでしょうか？もしかすると本屋で並んでいる書籍のタイトルで見た人や、テレビやネットニュースで見たことがあるかもしれません。

はたまた、全くもって初めて聞いたよと思われる人もいらっしゃるかもしれません。わがまち太子町の幼小中一貫教育の柱にも据えられている、この非認知能力とはいったい何なのかについて、お話していきたいと思います。

非認知能力とは、決して新しいものではなく、みなさんが幼少期に親御さんから言われてきたことや、子育てをする中で、子どもたちにどう育ってほしいかを願うときに必ずといっていいほど、関係してくる力になります。

例えば、コミュニケーション力や思いやり、自尊感情、向上心、意欲、想像力、自制心などなどが挙げられます。

これらの力は、学力テストや IQ テストのようなものを使って、点数化することが難しいです。このように客観的な数値で測ることができない力の総称を非認知能力と言います。ちなみに、非認知能力から「非」をとった「認知能力」は、テストの点数などで数値化することができる力であり、一般には学力と言われています。

学歴社会が高々と謳われていた頃は、点数で表される学力こそが大切であると考えられてきました。

一方、教育の目的とは人格の完成であり、その視点からしても学力のみならず、非認知能力を育むことは必須であることは疑いの余地がありません。

非認知能力という言葉に馴染みはなくても、今までも大切にしてきたものであると感じていただけたのではないでしょうか？さて、非認知能力が注目されるきっかけとなったのが、1960年代にアメリカで行われた「ペリー就学前プロジェクト」です。

これは経済的に恵まれない子どもたちを対象として行われた教育プログラムです。このプログラムを受ける子と受けない子をランダムで決めて行いました。

その後40年にわたる追跡調査の結果、プログラムを受けた子は、受けていない子に比べて、認知能力に差がないものの、学習成績が高く、より安定した社会生活を送り、犯罪率や生活保護受給率も低いということがわかりました。この結果を受け、幼小期から非認知能力を育てていくことこそが、将来において、社会への対応力につながって、人生をより豊かにしたと言えるのではないかと言われるようになりました。

「教えて！とくどめ先生」のコーナーは続きます！お楽しみに！

◆問合せ　教育総務課　☎98-5533